和歌山県立医科大学附属病院紀北分院外来診療医担当表

		月 AM	月 PM	火 AM	火 PM	水 AM	水 PM	木 AM	木 PM	金 AM	金 PM
総合診療	2診		総合診療 廣西		総合診療(循環器) 羽野	総合診療 廣西	認知症センター 廣西	総合診療(認知症センター) 廣西		総合診療(循環器) 羽野	
	3診	糖尿外来 河井		呼吸器 垣		泌尿器外来 稲垣(武)(2・4週)	肝臓 佐藤	糖尿外来 河井			
	4診		皮膚科 神人(第2週) 瀧脇	脳神経内科 梶本		脳神経内科 梶本		リウマチ膠原病 応援医師(第2週)		放射線科 中井	
	新患5診	丹羽		河井		応援医師		信貴		垣	
	外科診								櫻井【第3週を除く】		
脊椎ケアセンター	6診	大岩	認知症センター 大岩		上野【第1週】	大岩		大岩			大岩
	7診	整形外科 延與		整形外科 中川	足の専門外来 浅井(奇数週)	骨粗鬆症外来 寺口		整形外科 延與		整形外科 中川	
	8診	整形外科 原田		整形外科 寺口		整形外科 北山		整形外科 原田		整形外科 北山	
眼科		臼井(うすい)	鈴木	岡田	雑賀【第1週】 岩西【第2週】 石川【第3週】 西【第4週】 住岡【第5週】	永井	子ども外来 鈴木	鈴木		岡田	術前外来
		小門		黄斑外来(小門)	臼井(うすい)	臼井(うすい)				小門	
小児科		青柳		樋口		青柳		青柳		青柳	
リハビリテーション科		隅谷		隅谷		隅谷		隅谷		隅谷	
		南方		南方		南方				南方	
検査	内視鏡		垣本 CF	白井		岡田 月1回 不定期			岡田 CF		
	エコー	応援医師 心エコー					羽野 心エコー				

診察受付／月曜～金曜:午前8時45分～11時30分　※第1週の水曜日午後は、加藤医師が救急対応　令和3年7月1日現在

「かるて師匠の健康高座」

分院長･内科教授　廣西昌也

紀　子：新型コロナのワクチンが始まってるけど、おばあちゃんが昔学校でインフルエンザの予防接種受けたのを思い出すって言ってました。
可流亭：行列を作って順番にお医者さんが打っていくんだけど、自分の番が来るまですごく緊張したな。泣き出す子とか、どうしても打たせない子がいたりして。
紀　子：私たちは学校で予防接種はしたことがないんですけど、中止になったの？
可流亭：学童集団接種は1994年に中止されたんだ。当時、集団接種の効果が疑問視される意見があったり、病気の予防は個人それぞれが対処するべきだという考え方が出てきたからだろうね。インフルエンザワクチンの副作用をマスコミが大きく取り上げたことも影響したかも。
紀　子：学校での集団接種をやめても特に問題なかったの？
可流亭：「超過死亡」という言葉があるんだけど、これは国民の死亡数というのは年間を通じてある程度一定なのが、感染症のために普通より多く亡くなることなんだ。1990年台を中心にインフルエンザワクチンの接種が少なくなった10年ぐらいの間、明らかに超過死亡数が増えてしまっているのが明らかになってる。
紀　子：学校でのインフルエンザ予防接種には効果があったんですね。
可流亭：1998年、1999年には介護施設などでインフルエンザの集団発生や死亡が社会問題になってね、そのため、2001年に法律が改正されて、高齢者の方などに一部公費負担でワクチン接種ができるようになったんだ。
紀　子：ワクチンに効果があるのはわかったんだけど、ワクチンで副作用が出ることもありますよね。
可流亭：そうだね。30年ぐらい前に、ワクチンの副作用に関する裁判で国が負けたことがあって、その後国のワクチン政策は「集団接種」から「個別接種」へ、接種が「義務」だったのが「努力」になったんだ。
紀　子：すると？
可流亭：麻疹（はしか）とか百日咳なんかは、かつて日本で「集団免疫」ができていた病気なんだけど、また増えてしまうというようなこともおこっているよ。
紀　子：ふうん、ワクチンの副作用ばかり取り上げるマスコミもあるけど、せっかく減った病気がまた増えるのも困るし、なかなか難しいですね。

【お知らせ】
・令和３年７月より、眼科に岡田由香教授が着任しました。
・令和３年７月末で、放射線科の中井資貴准教授が退職しました。
・令和３年７月より、眼科の白井久美准教授が橋本市民病院勤務になりました。
・令和３年７月より、内科の信貴勇佑学内助教が和歌山県立医科大学本院勤務になりました。
・次回の紀北分院通信「あじさい」秋号は１０月発行です。

和歌山県立医科大学附属病院紀北分院　分院長　廣西昌也
〒649-7113　和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺219　TEL0736-22-0066（代）　FAX0736-22-2579
ホームページアドレス　http://www.wakayama-med.ac.jp/med/bun-in/index.html

2021年７月発行

和歌山県立医科大学附属病院紀北分院通信

あじさい

vol.37
2021.夏号

眼科の名医　岡田教授　紀北分院に参上!!

【掲載内容】

・眼科教授就任のご挨拶
・着任のご挨拶
・看護の日
・外来診療担当表
・かるて師匠の健康高座

■ 眼科教授就任のご挨拶

眼科
教授／岡田　由香
診察日：火・金

７月１日に紀北分院眼科教授を拝命した岡田由香です。有田市出身で、和歌山と留学先のアメリカのインディアナ州にしか住んだことがない生粋の和歌山人です。
和歌山県立医大を卒業後、ずっと大学に勤務していたので、初めて違う場所での勤務になります。３年前から紀北分院には月１回の診察で伺っており、患者さんやスタッフの皆さんが非常にいい方ばかりでしたので、ここに赴任できて大変嬉しく思っています。
私の専門は角膜創傷治癒で、特に脳腫瘍や糖尿病、ヘルペス感染などで角膜の知覚（痛みがわかる）が低下することで起こる難治性の神経麻痺性角膜症について研究を行ってきました。
臨床では、角膜疾患以外に、白内障、緑内障、網膜剥離や糖尿病網膜症などの眼底疾患、斜視、腫瘍など、全ての眼科領域における診療・手術に携わってきました。
高齢化が進む現在、視力を保つことは、生活の質を向上させることにつながると考えています。そのためには、眼科疾患を見つけ、早く適切に治療をすることが重要です。眼の違和感や視力低下など、目に関する心配事がある時は、眼科を是非受診してください。
しかし、紀北分院では新型コロナの影響もあり、手術に関しては、白内障だけしか対応できていないのが現状です。手術機器の整備など今後の課題はありますが、和歌山市内や大阪などに行かなくても、紀北分院で全ての眼科疾患に対応できるようなシステムをできるだけ早く構築していきたいと考えています。
紀北地域の眼科診療に全力で取り組みます。よろしくお願いいたします。

■ 着任のご挨拶

眼科
准教授／小門　正英
診察日：月・火・金

出身は和歌山市で、平成13年に和歌山県立医科大学を卒業しました。紀北分院には平成20年4月から1年間勤務していました。平成21年以降は和歌山県立医科大学附属病院で勤務し、この度、令和3年4月から12年ぶりに紀北分院へ戻ってきました。以前働いていた時は古い建物の旧病院でしたが、病院はきれいに建て替えられ、京奈和自動車道が完成し通勤も楽になりました。専門は、涙道閉塞による涙目の治療や加齢黄斑変性等の黄斑疾患の治療です。今回は涙道閉塞について説明させて頂きます。
涙は、上瞼の外側の裏にある涙腺で常に作られ、目の表面を潤した後に、目頭（めがしら）から始まる涙道と呼ばれる細い管を流れて鼻の中に排出され続けています。涙道閉塞とは、涙道がつまってしまう状態です。涙道がつまりますと、涙が鼻の中に排出されなくなりますので、涙目になったり、涙が常にこぼれたり、つまった涙道内では細菌が増えやすいため、目ヤニが続く不快な症状となることもあります。
涙道閉塞の原因は加齢によることが多いのですが、その他に、点眼薬の使用や、鼻の病気、顔面をケガした後などに起こることもあります。最近では、抗がん剤の内服後に発症するケースも多くなっています。
涙道閉塞が原因で、涙がこぼれてくる場合、治療としては手術が必要になります。涙道内を観察することが出来る直径0.9ｍｍの非常に細い涙道内視鏡を用いて治療を行うことが最近では、主流となっています。涙道内視鏡で涙道内を観察しながら、つまっている部分を通した後に閉塞のなくなった涙道内へチューブを挿入し2～3カ月間、涙道の閉塞部分を広げて治療します。内視鏡を使うことにより、顔に傷を残すことなく、局所麻酔、通院で１５分程度の手術で涙道閉塞を治療することが可能となり、また手術の成功率も上がるようになりました。残念ながら、紀北分院には、涙道手術の機械がないため、診断のみで治療は出来ませんが、現在も和歌山県立医科大学附属病院で涙道外来と涙道手術を担当していますので、流涙でお困りの方は、紀北分院を受診頂き、手術で治療可能な場合は和歌山県立医科大学附属病院で治療をさせて頂きます。

■ 着任のご挨拶

内科
助教／梶本　賀義
診察日：火・水

令和3年4月1日より紀北分院の内科医師として赴任させていただきました、梶本　　賀義（かじもと　よしのり）と申します. これまでの内科医の経歴としましては、脳神経内科を専門とし、認知症や脳梗塞、パーキンソン病などの神経難病の診断・治療・研究に携わって参りました。
脳神経内科の特徴としましては、十分な問診と丁寧な神経診察から病気を推測し、MRIや筋電図、脳波などの検査を参考にして診断や治療を深く考えることです。全身に張り巡らされた神経の障害を的確に診断するため、脳神経内科は「全身を診る診療科」とも言えます。これからの日本の超高齢社会では認知症や脳梗塞に加え、パーキンソン病などの神経難病が増えることが予想され、脳神経内科医の担うべき役割はこれまで以上に大きいと思われます。
紀北分院の内科外来の一部は、総合診療も担っておりますので、私自身、総合内科専門医として幅広い視野で診療をさせていただくとともに、神経内科専門医として先進的な脳科学に基づいた最新の診療を継続したいと思います。
また、当院が先進的に取り組んできた在宅訪問診療については、今後の超高齢社会においては欠かせないものです。特に神経難病の多くは根治療法がなく、慢性的に体の不具合が生じます。住み慣れた地域で暮らしていくためには、病院完結型の医療だけではなく、在宅訪問診療の需要がますます増えていくことが予想されます。引き続き、病院と診療所は密に連携し合い、時には当院の医療スタッフがご自宅まで出向いて, 患者さんやご家族を支えていくための最良の医療とケアを提供したいと考えております.

■ 看護の日

日本看護協会では、「看護の日・看護週間」制定30周年・ナイチンゲール生誕200年記念としてNursing Now（看護の力で未来を創る）キャンペーンを行っています。当院でも、5月12日を含む1週間を看護週間と定め、イベントを行いました。コロナ渦のため、ポスター掲示のみとなりましたが、院内の専門チーム（褥瘡・NST、骨粗鬆症、糖尿病サポート、認知症サポート、感染対策）の活動内容や、栄養指導、パンフレット、各種サンプルの配布を行いました。来院者の多くが、足を止めパンフレットを手にするなど関心の高さがうかがえました。